



都鄙物語



~13
4412
3



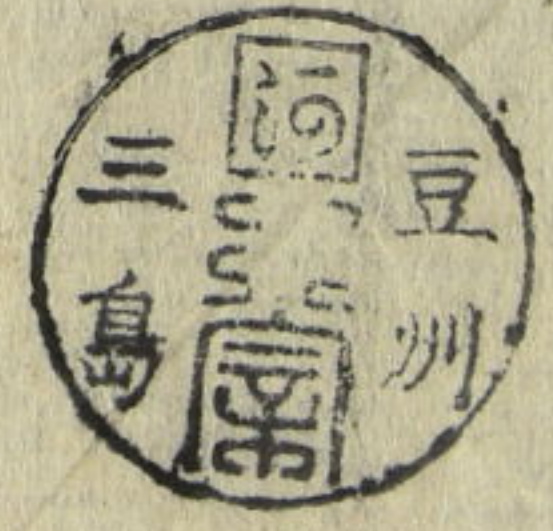
113
4412
3



都鄙物語卷之三

花售の小童歌をさげく賞をぬ

さる程小糸中勢太捕教時を左近太夫内宗の使節に
 郷八郎入道不_レ理解一_レ過せしを濁酒小_レ碇を分りて今又
 後悔斜_レか_レ成_レ進_レぬ八郎と同道して相摸守の亭小_レ糸入
 しも_レ某全_レく野_レ心_レ成_レ企_レふ_レ何_レに_レ軍_レ家_レの_レ使_レ節_レに_レも
 何_レに_レせ_レぬ_レを_レ我_レ一_レ族_レの中_レ小_レも_レ密_レに_レ使_レ節_レ促_レふ_レつ_レも_レあ_レり_レ族_レも
 あ_レん_レと_レも_レ心_レを_レ引_レえ_レん_レ所_レあ_レる_レ中_レに_レ曲_レて_レ免_レれ_レぬ_レ事
 も_レん_レと_レ一_レ族_レの_レ誓_レ書_レを_レさ_レげ_レり_レれ_レば_レ内_レ宗_レうち_レ笑_レひ_レて_レ何_レ事_レも
 是_レまで_レあ_レり_レぬ_レす_レま_レす_レけ_レす_レ清_レも_レも_レよ_レり_レく_レむ_レね_レぬ_レと_レ何_レの_レ心_レも



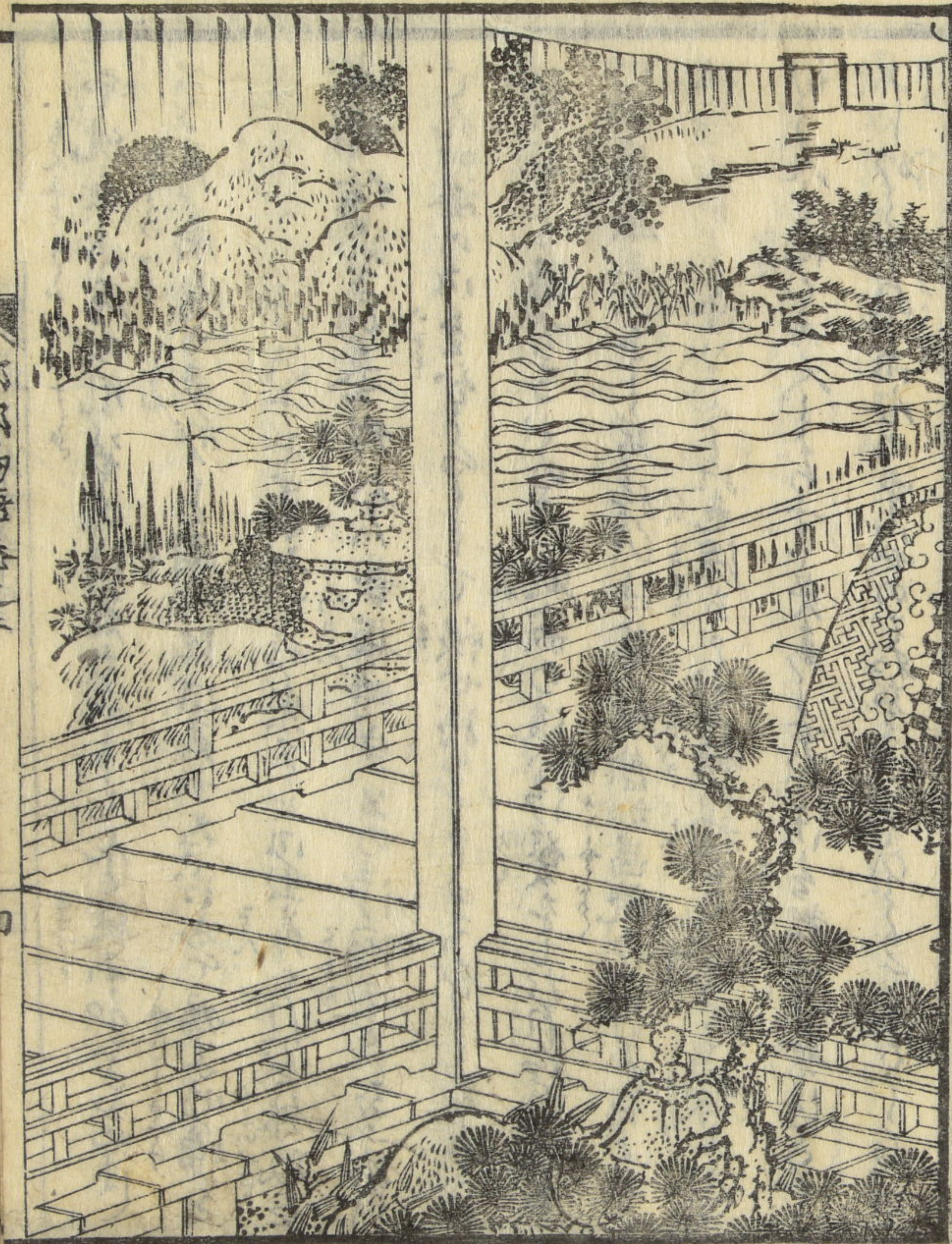
都鄙物語卷之三

幼きまゝの風流もあつて、教河を虎口をのがねるを地して
 於て宿所へ帰らざりしは、發動小折角にあらざりて
 一事も今更あまひけて、宿所へ系入の世にあらざりて
 亭宅を守護するに、鎌倉の徳大名より人々のぞく、時おこり
 少くもびりりて、まゝに雖も、川へさおもなり、因宗決り、宿所
 方より狼藉の憂もあらざり、内より守護をぞもせしめり、親王
 へ心もろく、たみづれ、おまひつゝ、小系教河より、かのごとく、今
 連清都小沢尺一阿諛のとも、かく作亡命して一人も来り、
 只所係下より、をば、芥田直孫正少弼、業時、駿河式了大夫
 道時、以下の武士、都合十八九人、むかひをせしめ、一は、日成の刻

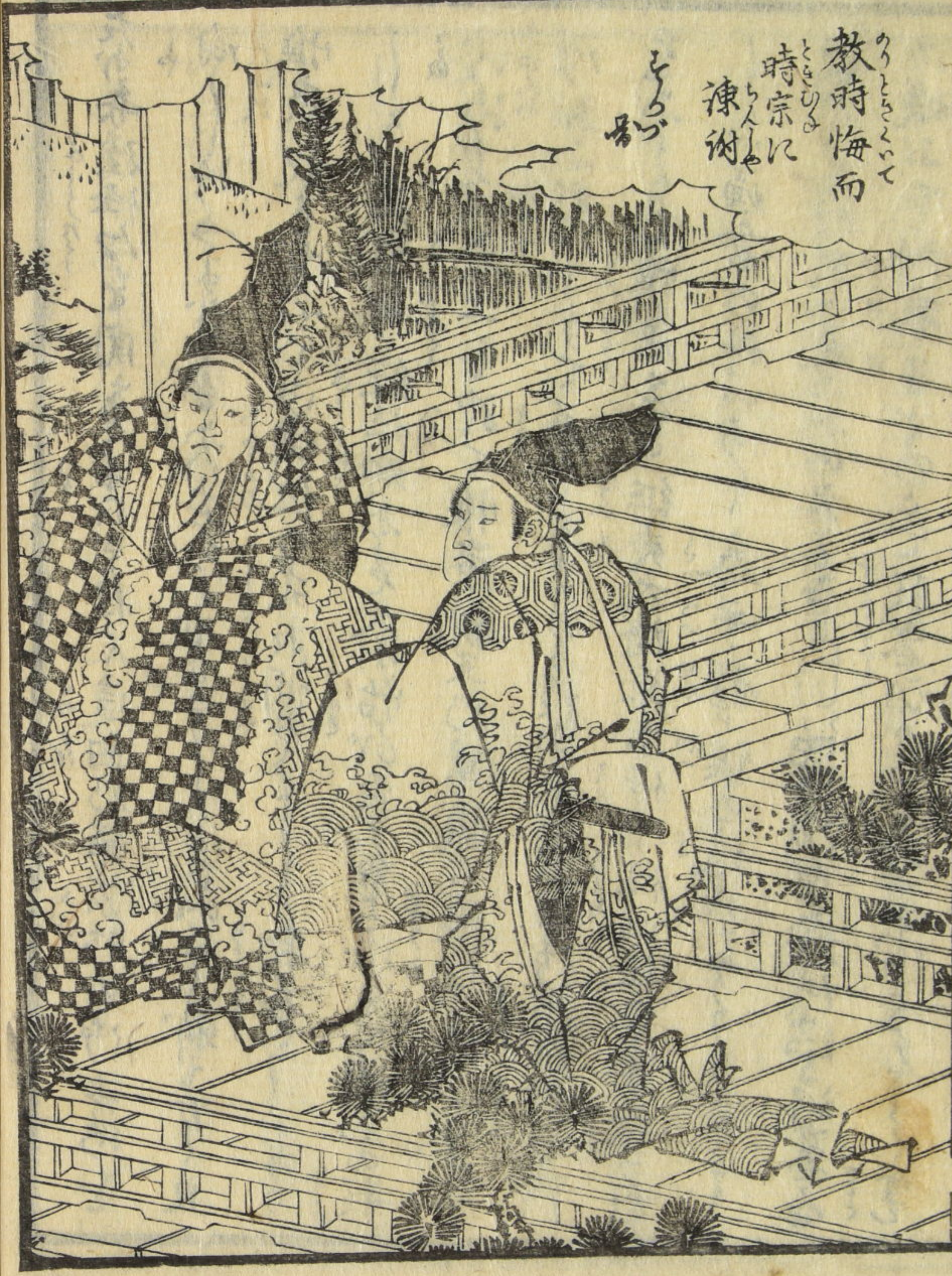
心かり小系小女房の専ら、めまの、侍所を志の、び、おの、裁、好、入、道
 務安が亭、小入侍、あ、せ、おの、門、より、赤、指、を、西へ、武、後、大、名、と、經
 て、系、都へ、より、せ、おの、七月、廿、日、小、系、左、近、將、監、時、辰、の、六、波、社
 の、亭、へ、入、侍、あ、り、せ、おの、悔、近、に、供、よ、候、せ、か、ご、と、く、も、地、ち、ん、び、き
 武、士、も、あ、り、寔、小、隱、使、の、何、り、と、女、を、我、痛、け、は、し、れ、又、君、後、略、時
 の、上、皇、逆、繼、ま、し、り、と、あ、り、侍、對、面、の、事、も、な、り、と、ま、ご、り、お、波、社
 成、出、さ、せ、おの、雷、神、の、雨、田、取、合、小、路、刑、部、の、秋、平、の、後、よ、小、任、久、閑
 系、小、一、日、を、ね、軍、職、お、と、り、ま、ご、り、徳、大、名、下、民、の、心、も、教、か、ご
 是、小、も、も、ま、ご、古、親、王、の、若、君、ご、ご、ご、二、才、小、あ、り、せ、おの、よ、を、後、の、將、軍
 と、仰、あ、り、せ、徳、倉、の、徳、大、名、お、め、り、拜、賀、并、謁、式、礼、お、す、と、り、り、候

小左うはらへ此大名法武士庶人蒼生中々安堵各々
 おのれくが居住へ立寄らるるが執権より後領頭人知縣の業
 日夜をあらめて非常の御心遣ひに及らるる後小狼藉乱妨の患もか
 く業の介り我親らるけり君へ宗孝親王の清子惟康親王
 とやありて清母君へ承りて授けられたる御女
 中幸子とやありて徳念ひて清誕生の宮ありてこの御女
 どり小宮内母子法共にお種ち武村の亭小入せきりて後
 時宗政村がとありていひて清讓位まりて京都後醍醐
 の上皇をばじめあまたも又もや武家よりいふあつとまをさ
 久と云々各々怖れをばし給へば上皇より清勅使とて中の御門

左小兼盛任々を関あるべきはさねて今回軍不助の清上海を
 海し給ふも武家お左のともよきことと云ふも辨もなり且
 惟康親王をばし清讓位の式お調りて勅答ありたり
 一々左少将經任卿お左大小位お上落して關東の
 清和お親らりてまで奏しけりりる後小兼盛も清始の斜お
 是小よりて惟康王を征夷大將軍お任じ位四位の上小叙られ
 一々の海倉の伴いりて恭平親の代にありりりて
 最明も討殺入道のおの方ときこしに保持の支權位は清基を
 小娘もて阿耶子とて形容ひらるるおや小よりりて
 一々



都置物語卷之三

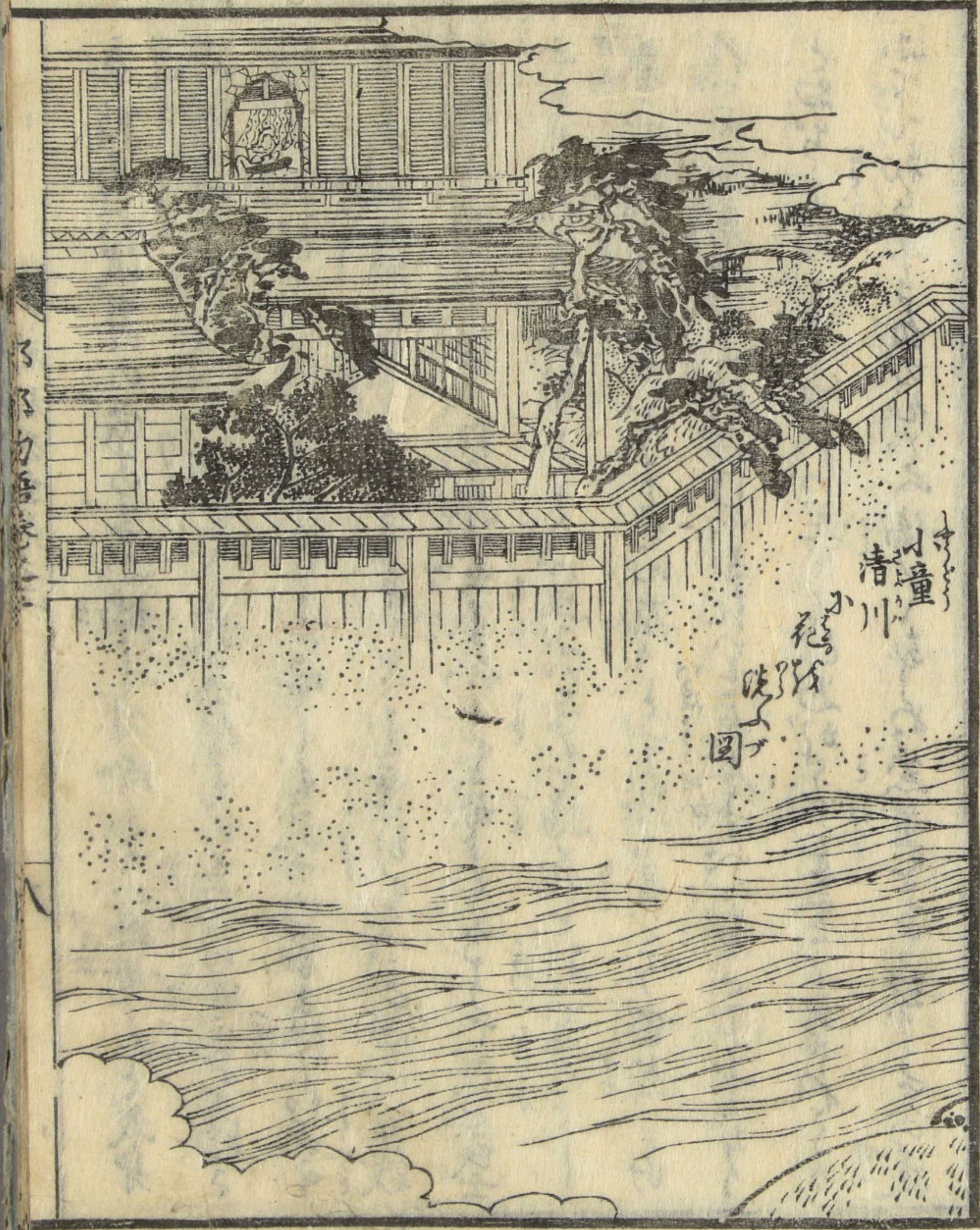


教時悔而
時宗に
凍附
とつ
あ

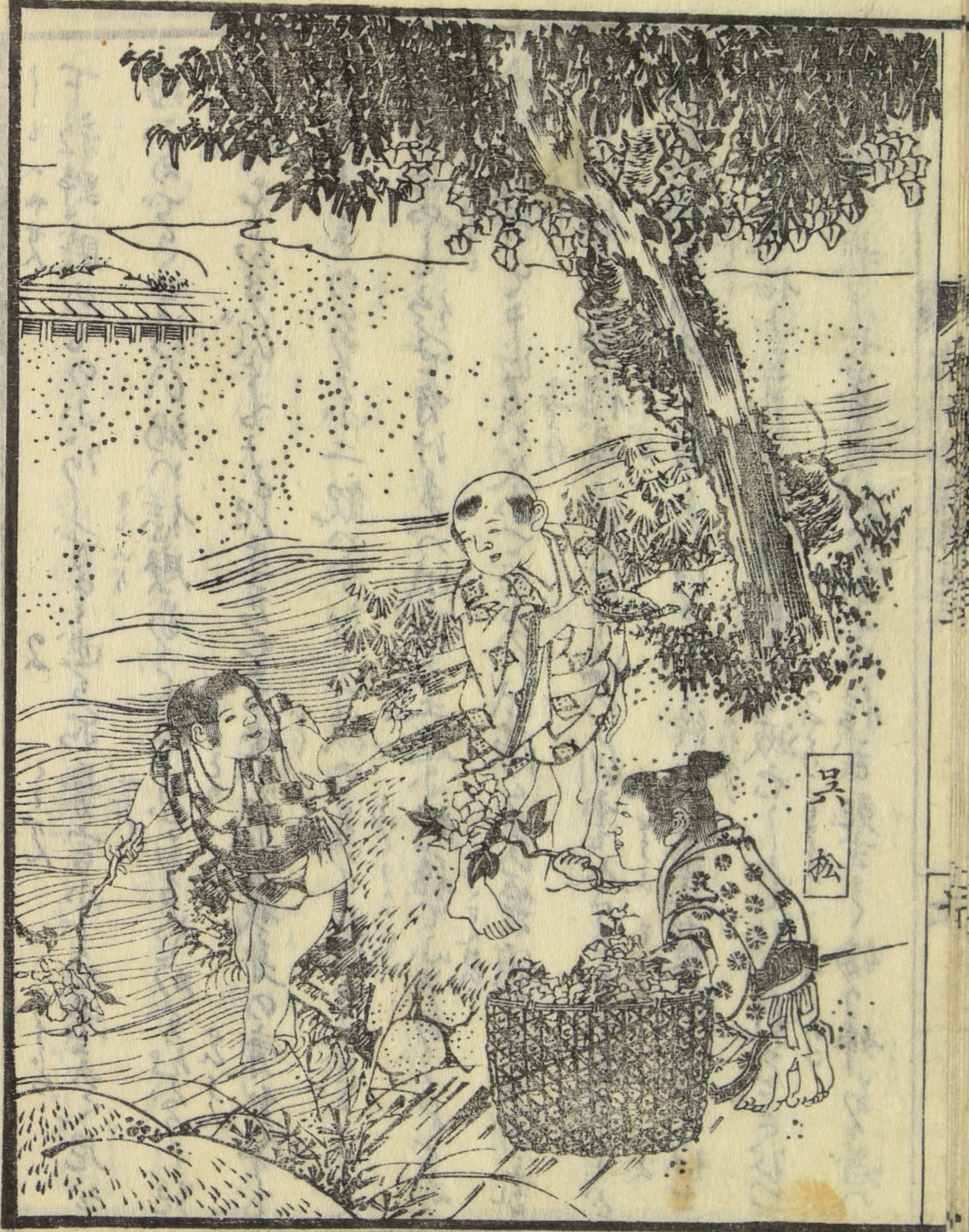
都置物語卷之三

や沈魚落馬の風あつは思をやらんと徒ふ心をやは
ちんぎょらくま ふうあつ
 なるる原も多かりと聞へは又十又兼あて婦子時捕を
なるる げんも たらかりと 聞へは 又 十又 兼あて 婦子時捕を
 西坪信濃守の基卿今ハ執權時宗公の法因母といふは
さいへい しんぬ しょうの 基卿 今ハ 執權時宗公の 法因母といふは
 て九州海のはるむらうて恨せ給ひざりともあつて
て 九州海のはるむらうて 恨せ給ひざりともあつて
 ひろねがも最明ちどの法道寂の後の法繁をもたれ給ひ南庭
ひろねがも 最明ちどの 法道寂の後の 法繁をもたれ給ひ 南庭
 の出家願ふたき一歩給ひ法華經愈加昌説のわけが地より
の 出家願ふたき 一歩給ひ 法華經愈加昌説の わけが 地より
 他念となく春いさくは色濃あふ山旅の枝をく流て山縁もが
他念となく 春いさくは 色濃あふ 山旅の 枝をく 流て 山縁もが
 かく人と向くの人もとりすはあすれは法を教のふ葉はさく
かく人と 向くの人も とりすは あすれは 法を 教の ふ葉は さく
 かくぞれと心の中い世のた和あふふむいりてあどく死の
かくぞれと 心の中い 世の た和あふふむいりて あどく 死の

録め流るる塵塚のゆとありて後あつてもふもものも
録め 流るる 塵塚の ゆとありて 後あつても ふもものも
 うらちのゆひたれい思ふが心もうきまをまじげされ侍婢
うらちの ゆひたれい 思ふが 心も うきまを まじげされ 侍婢
 少と尼公の心を慰むは思ふもあふ事の中をふや恨らん
少と 尼公の 心を 慰むは 思ふも あふ事の中を ふや 恨らん
 と或は多彼弁合せん保あふ貝より雙六の局をとおもひく
と 或は 多彼 弁合せん 保あふ 貝より 雙六の 局を とおもひく
 追めあふすが壺弁は中りしすあむむも取給は流しかま人の表
追めあふ すが 壺弁は 中りしす あむむも 取給は 流しかま 人の 表
 つがひのあひだのふま部の簾あふくも打揚てあひうらるる鎌倉
つがひの あひだの ふま部の 簾あふくも 打揚て あひうらるる 鎌倉
 町の野口ふして世度る民のむく世いあむり小治りぬれどもあま
町の 野口ふして 世度る 民の むく世い あむり 小治り ぬれども あま
 ながさきい貧く民のさくひを憂あふさほくそりあふも有
ながさきい 貧く 民の さくひを 憂あふ さほくそり あふも 有
 中へは族のをりも人あや柳胡のつみまの脊あつて秋の
中へは 族のをりも 人あや 柳胡の つみまの 脊あつて 秋の
 日割のさあやふはたをわがらけ人印さく思ふ足ふすむく
日割の さあやふは たを わがらけ 人印さく 思ふ 足ふすむく



小童
清川
花
洗
園



吳松

五月廿一日
新編
花
園

年

新編南六波羅の家の子小娘こわら付今ふての病母一人と我身わがみ
 孤他ひとりは思おもひもたげべき夜もあゝ又又あるもの生世の遠言を抄あら
 ねがふの呉松ごしょうとて中もあじしとて必しも武士の家は仕つかり
 かねた村落の黎民れいじんもあつ書とて字もつとて必し刀戟とうげき
 をまゝしめりし事あねとて母とてあつて我とて士し
 小あきしむるの心なりとて且ふも多し指死さしをめて業わざあり
 暮小の燈ともしりよ書とてそ心ありとて業わざあり家業けけ
 ねが母を看病のし川がはきけへあねといふ事今すべもあつとてもな
 とおちをねくち上りねが尼公もはあがりの事なれり
 小ても初はつと下したがぬの心とてへ備くあね無量むりやうとてあつて又の遠とほ

言ことをとりくちり母の教おしへずる己おのれをすく活計かつけいを力ちからたげ力を
 もつと書を讀よむをりしやねとて建けん気きあきとて母に死し
 小兒こわらうが花はなの花はなの尼にがはきとて小祿せろく欠か慰なぐさまへまも三枝さんしの花はな
 後のちが欠かを失しはぎとて中なかう綾あや瀬せふ干かけ墨すみたがは綾あや瀬せとて
 るいもや十一じゅういちとて尼君にきみのもふ侍さむらいくつて朝あさも夕ゆふも
 傍そばふりはまに尼君にきみを我子わがこのどくしとてみ給たまひの事ことも綾あや瀬せ
 くそそ例れいを離はなち給たまはる耳みみふりて中なかう人ひと志こころ多くのはし
 宣のたまひすも小綾こあや瀬せのいとあつて退ひきれりも白しろきよのせとてあ
 以まあへとて墨すみ又また老女らうにょの声をこゑをきて修しゆらひはあつての小兒こわら
 せらりよの砂すなの心こころの底そこ園えんをも賞あはれとて人ひとの心こころも

ころの女のゆあて権門のころをころり終りびしと祀養好を
 是を屢々替ふがゆひより表殿へ裏局より一頁七合の
 ころを扱ふ寸尼が寸志報するふい足だれいとも母の考養ふも
 ころへよりころり中へゆあをこれ縁指十疋あり吳松六何
 かのた夢をむすびゆへを拜も勿体なく受もさ感謝
 すころふもあふあふも上極の内慈を拜退ふあがゆ
 悪徳をころりあふとととあを極め頂戴の乳滾言をつり
 ころり退るんとあけろが尼君の中へゆあ短冊一書とあ
 ゆひとあふ吳松よあがゆあれ油がすめ二もこれとあ
 ころりて俺府一は濃一縁をよとと捧より油今下民の身

ころて案さへい知れぬもあをさゆれも
 けぬふあゆも對容のよもあゆべ一入尼が心をも願ふんと
 宣ひくれが吳松畏めてまづ清短冊を押すあ知くあ見すれが
 玉桂花橋の二枝小あ代やあひるん民の福その
 吳松けうををはくぐと沈吟して思惟る我今国学
 熱せびといへども終十二歳の女子あゆもあれあ上極のゆあゆ小
 あふもあゆづるゆれもけぬも平殿あゆの一体の國家の業を
 祝一併の陰陽和合の情を含めり玉つゆ此の春木あてゆあ
 橋の陰を此生あふ二陽のあをゆも用くさればは二枝小あ代
 やあゆもあゆづるゆれもあゆもあゆもあゆもあゆもあゆも

本邦の書

十

おまか
春初るれは春色の有へさるれあ
我まゝ十二の女あして
かろ事ふらむをさるけり人さるれどもけ小児妻情中あ
て自れおけしを知つものう伊ふせよ上梅おけりあ
れども事やゆんをさるけりあさるて

常おめをさるけり二枝の花のゆも焼く人
初あ人おゆしてかの老女がゆへさるけりあ
ちりりる其まの種ゆへさるけりあ
てうの流べさ業あつは知りゆへさるけりあ
随くたさるけりあ
てまふてゆへさるけりあ

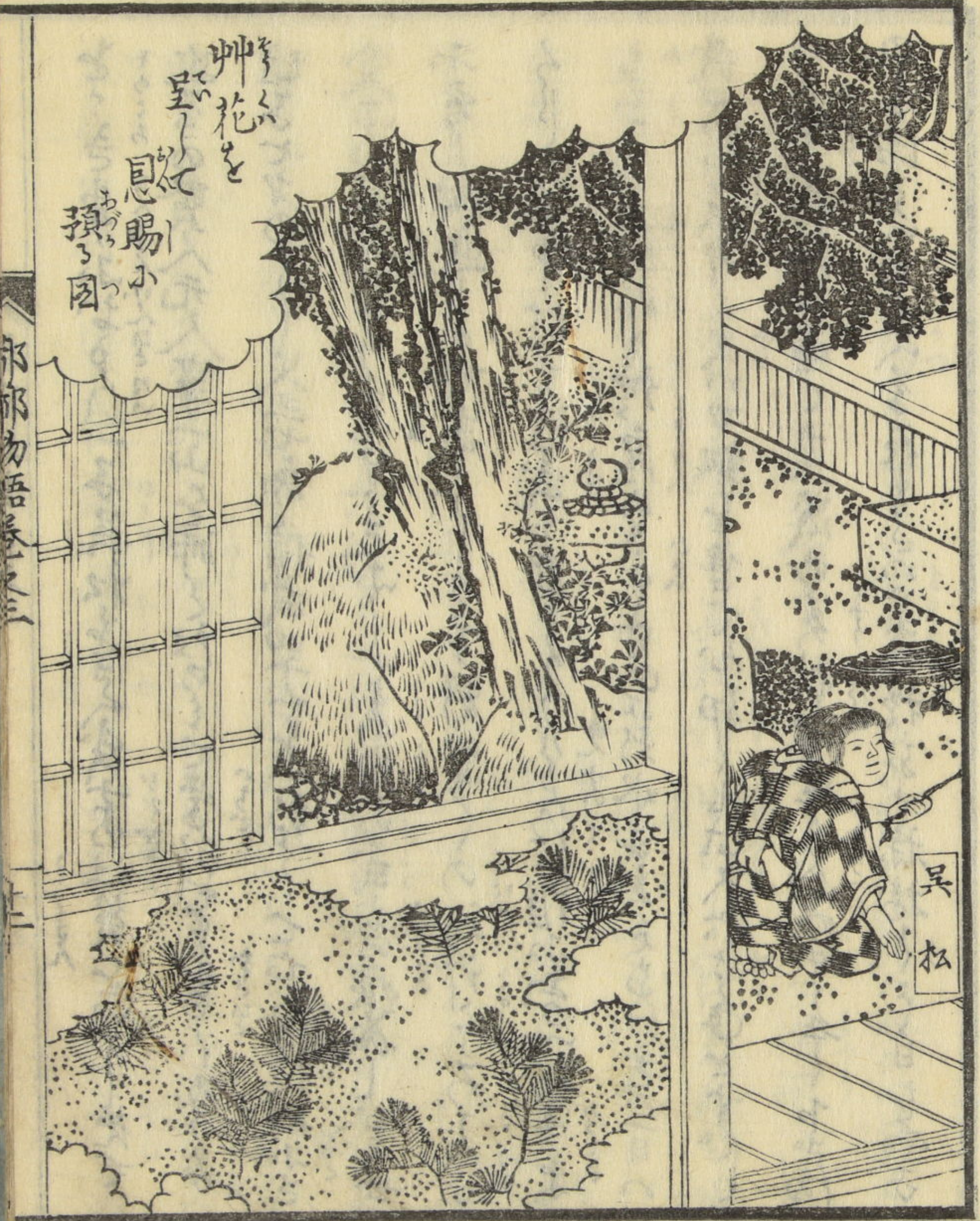
ていわむお母の病の床よゆるしく待まびつんとおのへ
やがゆもゆへさるけりあ
わさるて我があへて帰る

夜賊宝を賊せびりて退れ帰る

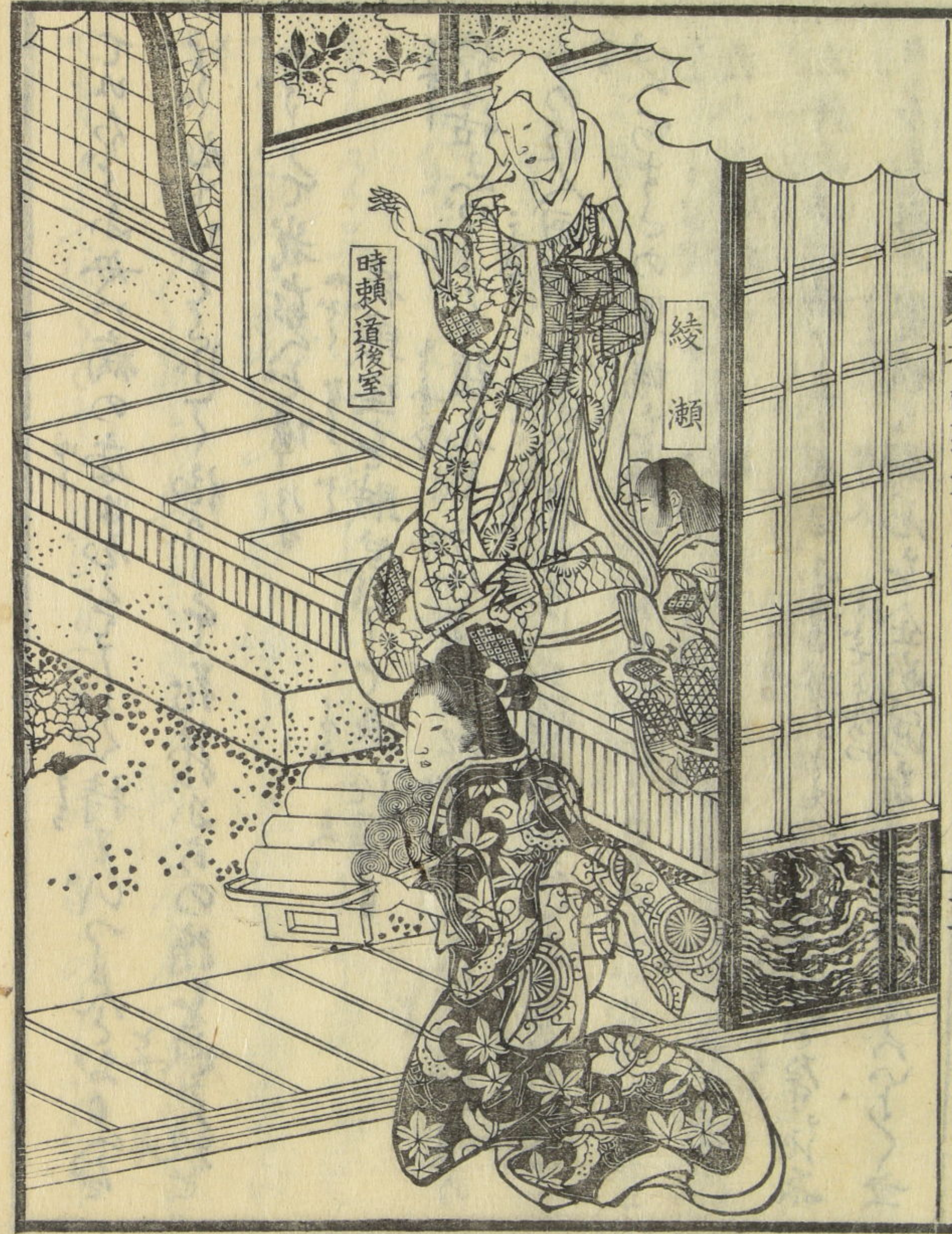
夜話まびり復えそしけ
おの役人国領々果の息ありしが鎌倉へまゝて
はへあすこの軍場を強く武名をむさるけりあ
因ふる孫狩お矢を射られり歩ゆる
急決おはを辞して民間小書筆をもつて童叢を奪れ在
らるが主家の後領も野んを企め滅あ

柳花を
聖に
恩賜
預つて
因

邦邦物語卷之三



吳松



時頼道後室

綾瀬

都鄙物語卷之三

十一

おろき申おおりの一子呉ねをさへ武士のは後をいま一死して
そのころ 久し人々をいひ
 近所の賢人元人寧一山を師とたのむて学問をまなごめり
 けり七才のよ〜又三七席信武四十一を一助として七人の位階おさ
 へ入少い妻の娘のこのせきふ〜て京家の武士の娘あし〜夫世
 にお育〜時迎とりて書〜〜〜が形穿くの結針〜〜〜も
 ら〜〜〜中形ては武も身ま〜〜〜の誰お〜〜〜
 もあ〜〜〜かぬり燈籠め〜〜〜の影水も〜〜〜あけき〜一日の
 武器を代か〜又の刀剣を佳口てお押〜もけ又六〜〜〜すじ
 〆年吳ねも癒て十二歳の春秋を還り今の中〜〜〜下〜
 のも活〜〜〜お〜〜〜花ま〜〜〜の葉の種お〜〜〜採摘〜〜〜目もや子

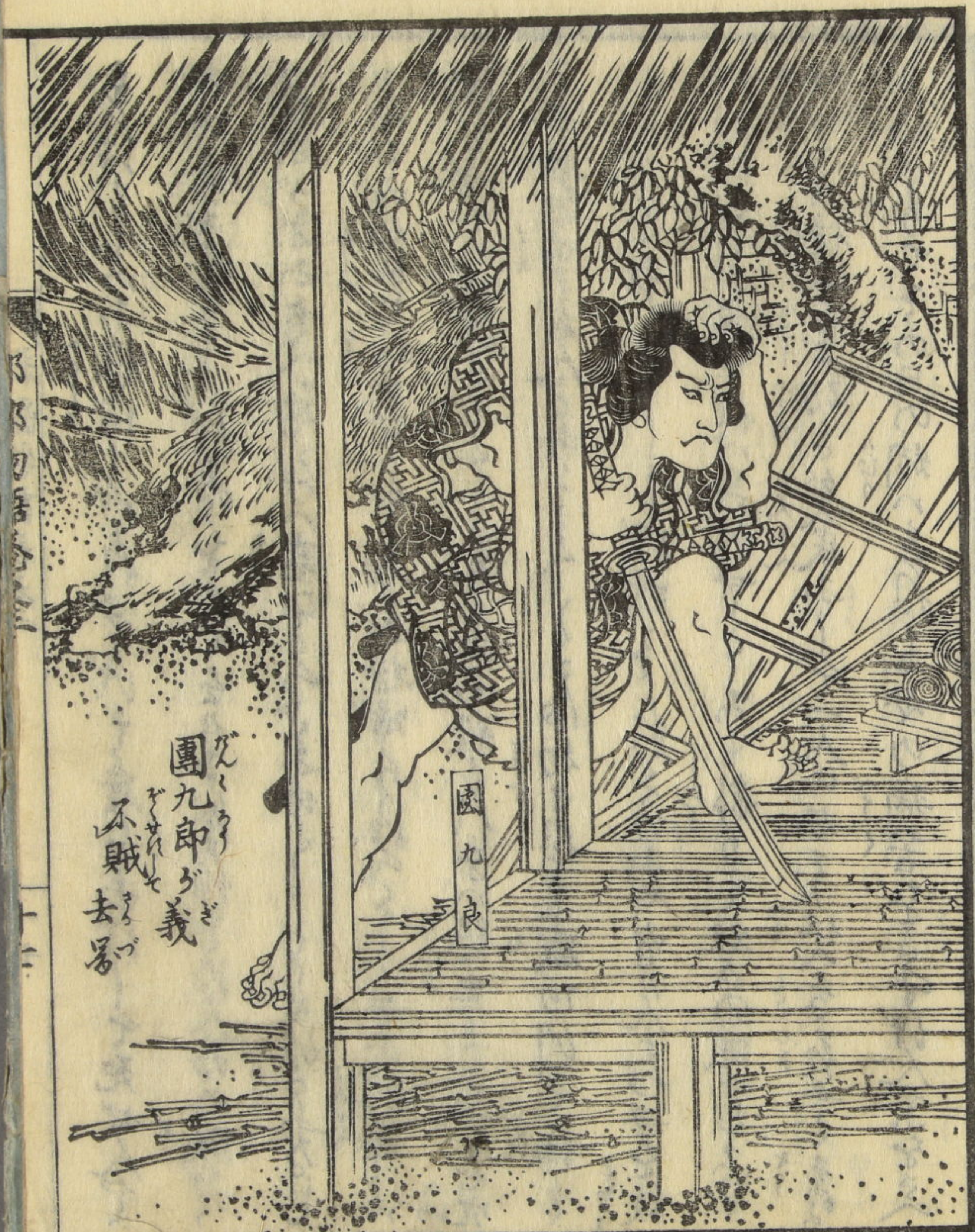
が〜〜〜〜〜喝〜〜〜あり世業〜〜〜たては親の母の〜〜
 もあ〜〜〜の地も〜〜〜かお〜〜〜〜〜〜〜原より湯液もはや
 く〜〜〜の念
 ひがれが近所の誰〜〜〜海お〜〜〜揚りて〜〜〜
 くれ〜〜〜病の〜〜〜〜〜積気少〜〜〜げあ〜〜〜もま〜
 〆〜〜〜耐〜〜〜す〜〜〜小色〜〜〜老小〜〜〜後意の〜〜〜
 中〜〜〜〜〜〜〜〜〜の起も母の〜〜〜
 海りあ〜〜〜我ホ今〜〜〜のの花畑へりて正身不〜
 帰り来〜〜〜人〜〜〜その中横乳の〜〜〜〜〜
 生慈の傍又け一色の医師早井氏の丸製小〜〜〜痛〜〜〜

妙割あるより一時昔江の崎へ来訪して帰るに医師小川を
 尋ねてすねがゆびをばさるおがされよ今志がく日教もさすな
 ば俺昔後て治し中へ人のを果介の宣使をばりしに
 て帰りにたかどきまを踏し先おけりか母いんむおやそ
 子吳まのがわさうたるにさうち病免もとの病床小まをさり
 越方り末のくもしおひつげおふおき現世を託るか叔も
 子のをとり丸茶をば後しりけだめふやりのれり乳も時
 小おかへるまうをさしゆ戸紙違わて此木をさるべ茶を煮て登
 飯のさけをさし吳松が啼をまのふ正午さおれども帰りにさ
 八川のうらふおぬねお川小ま新しへ入へ来さればよく

を地をいひて免さぬおさゆいりわのめあくこれ乳児の時を
 軒の裏をさ志づし晴を詰回けさまや途中ふて病の卒
 小まおめさるふやりの人おまをさのれへ二川といおぬり
 ちくともや八川の割もぬり小やみの積の置いさつをつら
 水の耳根ふちりくすけり小物ら踏お持病の積さへは
 つのりておのほやめも男ざりしが吳まの尼公の侍都を退し
 まへの内をさしより翼のうもあごく家お小啼り又れが母りも
 乳りらさゆる悩で枕を握げれば草鞋を解けぬもさく
 そのまも膝をかへ廻て湯液を退失くをさすりて看病ふ
 しらふふ志がく有てよをさくゆ地おまかつり句とて今日

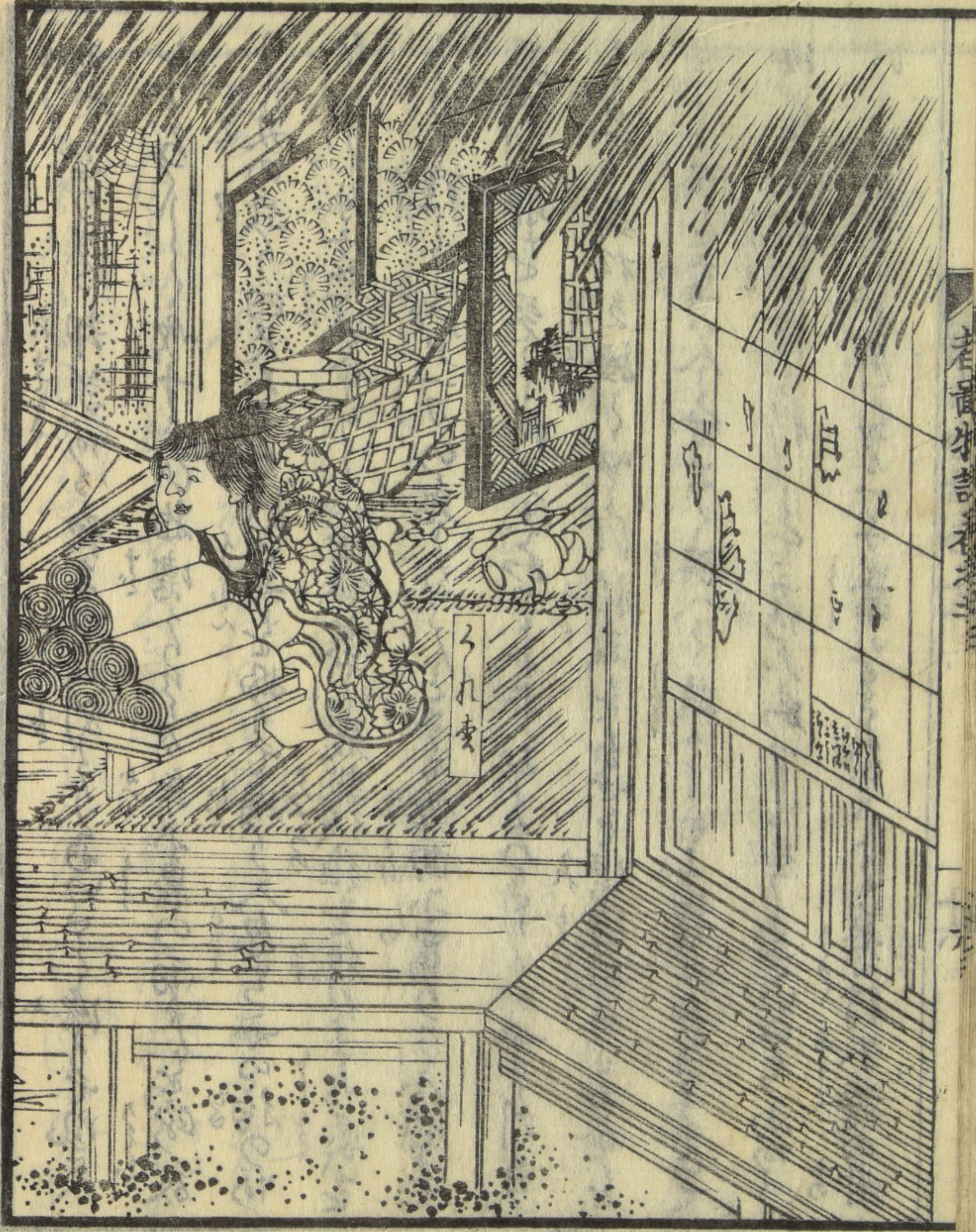
いま
 母が心をなやませしめりておろしみてやへんは
 しがが能母をうらめあせし奉願す以謂有し
 なりと執権御構の裏つなり小川にて花を洗ひ
 今家路小唄り来りまどおちもかくわがらり且綺詣十丈
 尼清曇より内惠投賜て又以待女綾流とて十一歳の女童
 我二もの花を思ふとて祝詞を誦し上りふより我小
 もは歌の對容をそのせと強てせ給ふこの女子は日れり
 一女子やとてうく稟せに御せ何うお人のいふて二親の名をも
 穢してんむせむしちよもて母子教へてこれむまへを
 おろしつゝ母がて讀くもろし母の待託は人のそり

うら
 啼仰り母もけはは後事もて悩げおん人せりぬ病
 を治すべた業刻の價をても入ぬて免せり人か
 せいおあんとおろしおあせけら後おしるも徳の尼公小
 綺詣十丈賜りて母の孝養おそえよとのおをせ徳の尼公小
 聖人は徳孝心天の道下海国母をて中し物もあ人母
 小も深きお忠を治びあへと墓徳たおあてて人せりぬ母心
 こも崔躍して歩治び淑道徳を揮つてた查賢もも小も
 中も徳の徳もつ有もまこれが波金りあり是あり
 たび長松の徳もつり時小助たるまべれぬも家路小唄り



團九郎が義
不賊去る

團九郎



ふれま

老翁物語

あれはもう不徳何れゆれば塵を去びて死せんや
 母の云ふをまじくば毒を立てさるるに命をば人々の賊
 ば我も身お有べたげに塵ひらぶよのくくめばかたし
 まづその白又を収めておぼろふ持帰り給へそ母不徳あつた
 汝を活ていぬるまじくそ一愛も供お殺されお怨鬼とあつて七
 より血を吐しぬ人と歩くまへるまふ知れぬも威河川を橋く
 ちこくもあつてくく賊しきおそのおや有らんまづ母を放
 て白又をさき免れれば呉松中らも怒りて扱りの賊おむい
 けりや俺を果幼き美民お一人の母は仕へる花中くまは
 と橋よりてその日の畑へまればも母の病苦をさすけ人業をさ

索免ゆれば近曾年らあつて天の助力をばく既お母の病苦を
 治りければ一副の金おのおお懸せりけまじく勉のたぐは貪
 ろくろ又おなす一俸僥あつた汝がくをば人を我家へお盗
 お入一命をすくたぬ人の命被害しても竊く人の動きを免
 てお憂かすべし我は是より連日のりを積く初めりいお母を
 艱ひ身を保んずお今の難事や何んかおのまに死帰く
 れとて給の袋指十疋をとりお賊の前へまじやればお母を
 供りおろりるるそまじく這沙金と指十疋をばく因縁を
 當はれ権の母君くれが孝を清感の効り下し物に褒賞をれば
 かりおを疎情おあはべり守とてつるお病苦の内お價をばき

そとめしやくそ修へくく秘置てご用りもちゆりは是
 を汝うちわれべ一回の君の清惠く病苦を脱ま一回の御お世へ
 て益用を倣しむ上極の内深情兩人の美苦哉しすけけりあ
 利ありばや登く指帰りて人お危しめらねくことあられば候
 去れをゆて大お悔想て我門を彩放逸し世わたり別を被
 て弱を助ち富お矯るを驚しまじりてをやめぬく世の勇
 勢を専らとけ我近に汝が孝順ある風況區くおせけり
 汝父執権の母公よりけ賜る山袋賞と年々の家も年々
 を窮び入るるそしれ恥しきよ母公くもと後漸とつへる
 わくわくつたいきりくぐりのおくりも有つれは候

こや佛曉お通けまば帰りまば我今足下達が善きり
 泥軟卒お未練の心おころしおのけは我世つひの気象入
 の孝心あるゆひをそとせを欺し君小忠を重んず人を奥弱
 とおりのおひおれが被刺截取強盗をも倣する今日お小
 美金下れた指をばかぐ取で立帰るも深たおむひのこまり
 たり事ぞうく今天下お中くおして教謚ぬれが我門を
 終べたかくまがもなされがゆび近に御の御の御となり
 て終おの市お截れり柔おお晒れ人我俸ひちて命おぶ
 へあつてびめぐり逢時弟もけりばそ耐の人情をうつしてあ
 がりんと指も袋もあふとけ刀をとおめてけりあは

と帰る

今天下の事... 都鄙物語... 終

